

# 日露戦争記録映画群のカタログング

## ——ジョゼフ・ローゼンタール撮影『旅順の降伏』の複数バージョン

大傍正規

1904年(明治37年)2月に開戦した日露戦争には、陸海軍による戦闘を記録するため国内外から多くの従軍カメラマンが派遣された。日本の第三軍に従軍した英国アーバン社(Charles Urban Trading Company, 1903-1917)のジョゼフ・ローゼンタール(Joseph Rosenthal, 1864-1946)もその一人であり、乃木将軍(1849-1912)のもとで『旅順の降伏』(*Port Arthur Siege and Surrender*, 1905)の撮影に従事した<sup>1)</sup>。また、日本人カメラマンが実際に戦地で撮影を行った日露戦争記録映画としては、大本営陸軍部の許可を得て吉澤商店が派遣した、藤原幸三郎撮影の「第一軍征露戦争実地活動写真フィルム」13種及び、博文館が派遣した、柴田常吉撮影の「第二軍征露戦争実地活動写真フィルム」10種が知られている。日露戦争終結後の1905年12月に発行された吉澤商店のカタログ『幻燈器械及映画並ニ活動写真器械及附属品定価表』によると、いずれも現存が確認されていない上記23種の他にも「最近日露戦争之部」と分類された80種あまりの日露戦争関連映画が存在していた<sup>2)</sup>。

このように一大ブームを巻き起こした日露戦争記録映画は、巡回興行という興行形態のもとで幅広い観客層に受容され、やがて1900年代後半の映画館や撮影所の出現を準備したと言われる。日露戦争期に刊行された新聞や雑誌、統計資料等をもとに、この複雑な隆盛の過程を詳らかにした映画研究者の上田学によれば、巡回興行者の一人であった駒田好洋(1877-1935)の「シネマテック」(日露戦争の実写映画とパノラマを組み合わせた見世物)と呼ばれる興行に端的に見られるように、日露戦争映画の興行とは「実写映画のみならず、複数の映画を組み合わせ、興行全体において、日露戦争という一つの物語を構成しようとする」ものであった<sup>3)</sup>。しかし、日本の初期映画興行史にこれほど大きな足跡を残した日露戦争記録映画に関して、これまで世界的にどのようなフィルムが、何本現存しているのかという基礎的な調査さえ行われたことはなかった。筆者は、第一次世界大戦が勃発してからちょうど100年の節目を迎えた昨年、マケドニアの首都スコピエにおいて開催された国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会議のシンポジウム「第一次世界大戦から100年を迎えて」(World War I - A Hundred Years on)における口頭発表を契機として、フィルムセンター(NFC)が所蔵する第一次世界大戦以前の戦争映画について調査を行い、それらが実質的に「日露戦争記録映画群」を構成していることを明らかにした<sup>4)</sup>。同映画群には、世界的にもオリジナル版の現存が確認されていない『旅順の降伏』のフッテージが再利用されており、同作品の「複数バージョン」を構成している<sup>5)</sup>。映画の誕生からわずか十年ばかりが経過した頃に撮影された『旅順の降伏』が、幸いにもオリジナルに近い形でNFCに現存している最大の理由は、同作品には実際に戦地で撮影された希少価値の高いフッテージが数多く含まれており、新たな日露戦争記録映画

が製作・配給・興行される度に、当該フッテージが再利用され続けたからである<sup>6)</sup>。実際、ギリシア王国とオスマン帝国との間に勃発した希土戦争(1897)に始まり、米西戦争(1898)やボーア戦争(1899-1902)へと続く初期の戦争映画の多くは、実際に戦地で撮影された実写映画というよりむしろ、陸海の戦闘場面をミニチュア等で模した再現映画であった<sup>7)</sup>。FIAF加盟機関の協力を得て、世界各国に残存していることが明らかになった日露戦争関連映画の多くが再現映画であったのも、こうした事実を裏付けているだろう(表1)<sup>8)</sup>。

表1 『旅順の降伏』以外の日露戦争記録映画を所蔵する機関

所蔵機関	映画題名(製作年)	製作、撮影	再現/実写映画、白黒/染色版の区別、長さ(ft/m)の区別は各機関の報告に準じた)
NFC	日露海戦 ( <i>Combat naval russo-japonais</i> , 1904)	パテ社、リュシアン・ノンゲ	再現映画(白黒、57.664ft)。
CNC	日露海戦 ( <i>Combat naval russo-japonais</i> , 1904)	同上	再現映画(染色、白黒)。
CNC	旅順の暗礁 ( <i>La Vigie de Port-Arthur</i> , 1904)	同上	再現映画(染色、白黒)。
CNC	日露戦争—旅順周辺 ( <i>Événements Russo-Japonais: Autour de Port Arthur</i> , 1904)	同上	再現映画(白黒)。
FTC	日露戦争—旅順周辺[デジタル復元版] ( <i>Événements Russo-Japonais: Autour de Port Arthur</i> , 1904)	同上	再現映画。フィルモテカ・デ・カタルーニャによるデジタル復元版(2012年作成)。
LC	旅順港攻撃 ( <i>The Attack on Port Arthur</i> , 1904)	セーリグ社	再現映画(白黒、17ft)。
LC	旅順水雷攻撃 ( <i>Torpedo Attack on Port Arthur</i> , 1904)	同上	再現映画(11ft)。
LC	鴨緑紅の戦い ( <i>The Battle of the Yalu</i> , 1904)	AM&B社、G.W.ピッツァー	再現映画(白黒、217ft)。
LC	遼陽の英雄 ( <i>The Hero of Liao Yang</i> , 1904)	同上	劇仕立ての日露戦争映画(白黒、531ft)。
LC	オランダの潜水艦テスト ( <i>Holland Submarine Boat Tests</i> , 1904)	同上	実写映画(白黒、175ft)。ここに登場する潜水艇は、同フィルムの公開後に日本政府が購入し、日露戦争で使用されたという。
LC	ポーツマスの平和使節 ( <i>Peace Envoys at Portsmouth, N.H.</i> , 1905)	同上	実写映画(白黒、173ft)。
LC	ポーツマス日露講和会議 ( <i>Scenes and Incidents, Russo-Japanese Peace Conference, Portsmouth</i> , 1905)	エジソン社、エドウィン・S・ポーター	実写映画(白黒、342ft)。
LC	ロシア軍と日本軍の前哨戦 ( <i>Skirmish between Russian and Japanese Advance Guards</i> , 1904)	同上	再現映画(232ft)。
LC	仁川沖海戦 ( <i>Battle of Chemulpo Bay</i> , 1904)	同上	再現映画(白黒、84ft)。
LC	日露講和代表団のニューヨーク出発 (1905) ( <i>Japanese and Russian peace delegates—leaving New York City</i> , 1905)	製作会社不詳	実写映画(3分19秒)。
РГАКФД	日露戦争。パテ・ジュルナル ( <i>Русско-японская война. Патэ-журнал</i> , 1904)	パテ社	再現映画(167m)。
РГАКФД	パテ・ジュルナル。日露戦争 ( <i>Патэ-журнал. Русско-японская война</i> , 1904-5)	同上	再現映画(231.1m)。
РГАКФД	青島要塞の日本人たち(日露戦争映画の断片) ( <i>Японцы у крепости Циндао</i> , 1904-5) (Фрагмент фильма-инсценировки о русско-японской войне)	製作会社不詳	再現/実写不詳(39.4m)。
РГАКФД	日露戦争の記念碑 ( <i>Памятники русско-японской войны</i> , 1900-1916)	同上	再現/実写不詳(56m)。
РГАКФД	黄海海戦(日露戦争1904) <i>Бой на реке Ялоу</i> (русско-японская война - 1904 г.)	同上	再現/実写不詳(50.7m)。

本稿の目的は、NFCに現存する日露戦争記録映画群のカタロギング作業を行うことを通じて、世界的な文化遺産と言える『旅順の降伏』の最長版ないしは完全版を将来的に作成する際に基礎となる、個々のフィルムの特徴(題名、形状、カラーの種類、長さ、公開年等)や来歴を同定することである。具体的には、モノとしてのフィルムのエッジコードやスプライス痕という、当該フィルムが作成された年代の特定につながる手がかりを調査するとともに、1925年7月にはじまり1939年10月の映画法施行で強化された、内務省警保局による映画検閲記録(検閲番号、映画題名、巻数、m数、映画製作者、検閲申請者等が記載された検閲記録)を適宜参照することで、複雑な歴史的経緯をたどってNFCに収蔵された日露戦争記録映画群の歴史的なコンテキストを同定する<sup>9)</sup>。それでは、個々のフィルムの分析に入る前に、まずは『旅順の降伏』の全体像を把握しておこう。

### ローゼンタール撮影『旅順の降伏』の全体像

#### —「アーバン・カタログ」と『活動写真 百科寶典』に見る「オリジナル」の形

NFCが所蔵する日露戦争記録映画群が『旅順の降伏』の複数バージョンを構成していることを裏付けるため、まずは同作品の「オリジナル」(完全版)の形を把握しておく必要があるだろう。しかし、『旅順の降伏』のオリジナルの形を留めているフィルムは世界的にも現存しておらず、その全体像を把握することは必ずしも容易でない<sup>10)</sup>。さらにNFCに現存する『旅順の降伏』のフッテージの並びもオリジナルの形を完全に反映したものではないため、現状では、英国アーバン社が1905年2月に発行したカタログ「パイオスコープ映写機用の高級映画リスト改訂版」(以下、「アーバン・カタログ」あるいは「UC」と表記<sup>11)</sup>)や、1906年にMパター商会を設立し、1912年の日活創業にも関わった梅屋庄吉が、自らが所蔵するフィルムの中から教育的価値の高い約400種を推奨した『活動写真 百科寶典』(三光堂、1911年)のような、公開当時に刊行された文献を参照する必要がある。

まず最初に、この二つのカタログを比較検討すると、『旅順の降伏』には「オリジナル」版と「ダイジェスト」版という二種類のバージョンが存在していたことが明らかになる。アーバン・カタログによれば、『旅順の降伏』(*The Siege and Surrender of Port Arthur*)のオリジナルは、第一部「満州におけるロシア軍」(*The Russian Army of Manchuria*, 1600ft)、第二部「旅順包囲」(*The Siege of Port Arthur*, 1050ft)、第三部「旅順開城」(*The Surrender of Port Arthur*, 1150ft)という、全長3800ft(約80分)の計三部で構成されていた<sup>12)</sup>。ジョージ・ロジャース(George Rogers)撮影の第一部「満州におけるロシア軍」の存在は確認されていないが、NFCに現存する『旅順の降伏』のフッテージは、ローゼンタール撮影の第二部「旅順包囲」と第三部「旅順開城」を足したバージョン(2200ft)から、一部のフッテージを除いて作成された「ダイジェスト」版(1500ft)にすべて由来している。ここで、『活動写真 百科寶典』に掲載されているカタログ番号106『旅順の降伏』所収の全24場面(1ショットで構成されているものと複数ショットで構成されているものが併存)を便宜的に梅屋(UMEYA)の頭文字を取って「U-1～24」とナンバリングするとともに、UCに掲載されている第二部「旅順包囲」、第三部「旅順開城」の場面リストをそれぞれ「包囲-1～17」、「開城-1～15」として「U-1～24」と比較検討してみると、次のような対応関係が見えて来る(表2)。

表2 『活動写真 百科寶典』及びUC所収の場面対応表

『活動写真 百科寶典』所収の場面リスト	略記	UC所収の場面リスト
日本軍の横濱出發	U-1	UC : 1304 <sup>13)</sup>
參謀會議に於る大島大將	U-2	包囲-3
山中の運搬車	U-3	包囲-2
軍隊山を踰えて進軍す	U-4	包囲-4
塹壕内に於る銃の掃除	U-5	包囲-7
同上 銃の検査	U-6	包囲-8
一千の日本兵、百十噸の巨砲を曳く	U-7	包囲-12
夜戦砲の發射	U-8	包囲-13
旅順附近の要塞及塹壕	U-9	包囲-10
巨砲の(百十噸)旅順砲撃	U-10	包囲-11
二龍山要塞の爆發	U-11	包囲-9、14
日本軍二龍山砲台に吶喊す	U-12	包囲-6
破壊されたる二龍山砲台の光景	U-13	包囲-15
要塞内の俘虜	U-14	包囲-17
大島大將の水雷檢閲	U-15	包囲-16
降伏書の調印せられたる支那民屋	U-16	開城-1
乃木大將、ステッセル將軍に會見の爲め到着	U-17	開城-2
降伏後ステッセル將軍の出發	U-18	開城-3
ステッセル將軍降伏後、乃木大將の出發	U-19	開城-4
露國俘虜の旅順出發	U-20	開城-8
ステッセル將軍夫人を伴ふて旅順を去る	U-21	開城-11
捕虜満載の汽車旅順を發す	U-22	開城-10
日本軍の旅順入城	U-23	開城-13、14
日章旗旅順港頭に翻る	U-24	—

『活動写真 百科寶典』所収の場面リストである「U1～24」には、「U-15」と「U-16」の間に明確な境界(表2・太線)があり、前半部分の「U1～15」がUCの第二部「旅順包囲」に対応し、後半部分の「U16～24」が第三部「旅順開城」に対応している。『活動写真 百科寶典』所収の場面リストに含まれていて、UCからこぼれ落ちているのは、「包囲-1」「包囲-5」及び、「開城-5」「開城-6」「開城-7」「開城-9」「開城-12」「開城-15」の全8場面である。つまり、オリジナル版に含まれていたこれらのフッターは、公開当時何らかの理由で切除されたか、ダイジェスト版が作成される過程で失われてしまったと推定される。『活動写真 百科寶典』所収の『旅順の降伏』の長さ1500尺及び場面数24と、デニス・ギフォードが2001年にまとめた『イギリス映画カタログ』所収の同作品の長さ1500ft及び場面数24とが概ね一致していることから<sup>14)</sup>、英国アーバン社は当初から『旅順の降伏』のオリジナル版とダイジェスト版という、二つのバージョンを販売していた可能性が高いのである<sup>15)</sup>。

それでは『旅順の降伏』の全体像を把握した所で、次にNFCに現存する日露戦争記録映画群(表3)を同定するため、『旅順の降伏』のフッターを部分的に含むポジフィルム8本の物理的特徴及びその来歴を調査し、カタログ化作業を進めていく<sup>16)</sup>。

表3 『旅順の降伏』のフッテージを含む日露戦争記録映画リスト

略称	フィルム題名	形状、 カラー の種類	検閲番号/ 公開年	時間 (fps)、 長さ (m, ft併記)	『旅順の降伏』の フッテージが 登場する順序	備考	収蔵 年度
①NFC旅順	旅順の降伏 [不完全版][仮題]	35mmP (染色)	検閲番号なし、 公開年不詳	13分 (14fps)、 207.575m、 670ft	U-1→2→3→4→5→ 6→7→8→9→10→1 1→12	『旅順の降伏』のダイジェスト版・ 全24場面のうち、前半の12場面 で構成。NFC所蔵フィルムで唯 一、英語のメインタイトルが接合さ れている。2005年に個人寄贈の 可燃性染色ボジを基に復元、「発 掘された映画たち2014」で上映。	2005年
②-1國寶・ 最長版 (谷版)	國寶的記録映画・ 旅順開城と乃木將軍 [不完全版]	35mmP (白黒)	検閲番号なし、 公開年不詳	24分 (14fps)、 377.355m、 1238.04ft	U-12→1→9→4→2 →6→7→8→15→3→ 10→9→10→13→12 →11/U-17→18→19 →20→21→23	NFCが所蔵する最長の日露戦争 記録映画で『旅順の降伏』の19場 面を含む。2014年に既蔵16mm DNを基に復元、上映企画「発掘 された映画たち2014」で上映。日 露戦争期に巡回興行をしていた駒 田好洋の設立したセカイフィルム 社が1935年に公開したバージョン が改変され、後半に奉天攻撃の様 子を再現したフッテージが繋ぎこ まれている。	2014年
②-2國寶 (谷版)	國寶的記録映画・ 旅順開城と乃木將軍 [不完全版]	16mmP (白黒)	検閲番号なし、 公開年不詳	22min (14fps)、 142.646m、 468ft	U-1→9→4→3→6→ 8→13→2→7→10→1 1→12→10/U-17→1 8→19→21→20→23	②-1國寶・最長版(谷版)とほぼ同 内容だが、多数のテープ・スプラ イズ痕があり、『旅順の降伏』のフ ッテージが登場する順序も微妙に異 なっている。	2002年
②-3國寶 (J38)	國寶的記録映画 旅順開城と乃木將軍	16mmP (白黒)	検閲番号 「J38」、 1935年	18min (14fps)、 117.391m、 385.14ft	U-1→3→9→2→4→ 6→12→7→8→10→ 11→13→15→12/U- 17→18→19→20→21 →23	1953年に国立近代美術館が津田 時雄から購入した可燃性フィルム を基に作成した35mmDN(FUJ 58-JS)が現存しているが、②-3國 寶(J38)は16mmボジ。いずれも「國 寶的記録映画 旅順開城と乃木將 軍」が1935年に公開された当時の 形を留めている。	1953年
③鳥羽版35	日露戦争記録 [仮題]	35mmP (染色)	検閲番号なし、 「映画の歴史を 見る会—明治 後期から大正 大震災以前ま で」(1954年) にて上映	15分 (14fps)、 239.887m、 787.03ft	U-17→18→19→20 →21→23→20	『旅順の降伏』の後半部分にあたる ステッセル將軍降伏の場面に、大 阪フィルム商会在1929年に製作 した「明治大帝の御英姿及び日露 戦争の中心人物 短縮篇」が繋ぎ 込まれている。「発掘された映画た ち2014」では、「明治大帝の御英 姿及び日露戦争の中心人物 短 縮篇」と題して上映。	1988年
④9.5mm	國寶映画 日露戦争 回顧録	35mmP (白黒)	検閲番号なし、 製作年不詳	13min (14fps)、 201.781m、 662.01ft	U-18→19→23→21	1932年に日本活動写真株式会社 (現日活)が製作し、伴野文三郎が 検閲申請に出した作品の複製であ ると思われる。	1996年
⑤日露大戦	実戦記録映画 懐ひ起せ 日露大戦 [不完全版]	35mmP (染色)	検閲番号 「G5710」、 1932年	9分 (16fps)、 166.451m、 546.10ft	U8→12	プラネット映画資料図書館所蔵の 35mm可燃性染色ボジを基に作成 した35mmプリント。「ロシア軍と 日本軍の前哨戦」(1904、エジソン 社)等のフッテージを含む。「発掘 された映画たち2014」で上映。『旅 順の降伏』のフッテージ数が少ない ため、16fps。	2014年
⑥返還・ 追懐	第一篇 日露戦役 追懐ノ巻	16mmP (白黒)	検閲番号 「H143」、 1933年	18分 (14fps)、 162.574m、 533.38ft	U-1→4→3→7→2→ 15→6→10→8→10→ 11→12→/U-17→18 →19→20→23	返還35mm可燃性ボジを基に作 成した35mmDN(404.64m)から 縮小した16mmボジ。満洲教育映 畫協會製作。	収蔵年 不詳

## NFC版『旅順の降伏』—英語のメインタイトルを含む可燃性染色ポジ

個人寄贈の35mm可燃性染色ポジから復元したNFC版『旅順の降伏』[仮題]には、所蔵フィルムの中で唯一、英語のメインタイトル「PORT ARTHUR SIEGE AND SURRENDER.」のフッターが含まれている。同ポジには日本語のメインタイトルが欠落しているため、公開当時の映画題名を特定する手がかりを欠いているが、『活動写真 百科寶典』に掲載されている『旅順の降伏』全24場面の最初の12場面の梗概が同ポジのフッターの並びと完全に一致するため、NFC版『旅順の降伏』[仮題] (略称:① NFC旅順)という呼称を与える。

同ポジを[仮題]としたもう一つの理由は、当該フィルムが1925年7月から第二次大戦下にかけて公開された事を示す検閲番号の痕跡が見あたらない上に、本篇の冒頭部分に「KODAK ▲▲」の刻印がある別のフッターがサプライズで繋ぎ込まれているためである(口絵、4頁及び図1)。イーストマンコダックのイヤーコードチャートによると「KODAK ▲▲」は1921年、1941年、1961年、1981年のいずれかに作成されたフィルムであることを示唆しているが、1920年に創設された「明治神宮」がとらえられたこのフレームがサイレントフルフレームであるため、トーキー以後のものではなく、1921年に作成されたフィルムであると推定される。それゆえ、同フッターの直後に接合された『旅順の降伏』のフッターは、1921年以前に作成された可能性が高いのである(事実、同ポジは複製や改変を繰り返して作成された他のフィルムと比べて、きわめて優れた画質や画調を有している)。また、「明治神宮」のフッターの直前にも、明治政府が国家を顕揚するために作成した「教育勅語」の全文が挿入されていることから、①NFC旅順は、1921年から内務省の映画検閲がはじまる1925年にかけて「国民教化」のために再編集・再利用されたフィルムであると推定できるだろう。

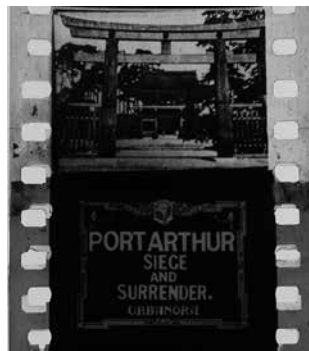


図1 英語のメインタイトルが接合された① NFC旅順

## 『旅順開城と乃木將軍』—1935年公開時の形を留める②-3 國宝

国立近代美術館(当時)が、1953年11月6日に元キネマ旬報同人の津田時雄(1898-1967)から購入した可燃性フィルムを基に、1958年頃に作成した35mm不燃性デュープネガ(DN)には、「國宝的記録映画 旅順開城と乃木將軍」(製作・英国アーバン會社 撮影・ロゼンシヤアル氏 日本版權所有・東京セカイフィルム社)(次頁、図2)というメインタイトルと、統一感のある書体および背景デザインで構成されている中間字幕、そして「終」(エンドタイトル)の全てが残存している<sup>17)</sup>。この不燃性35mmDNにおいては、複製基の可燃性ポジに穿孔されていたと思われる検閲番号「J38」(次頁、図3)の転写痕が幸いにも残されており、同フィルムを歴史上に位置づけるうえで重要な役割を果たすだろう。実際、1935年に発行された『映画検閲時報』の「J38」欄に掲載されている可燃性ポジの長さ(309m)が、この35mmDNの実長(293.26m)と近似していることから、同35mmDNは、日露戦争期に映画説明者として名を馳せた駒田

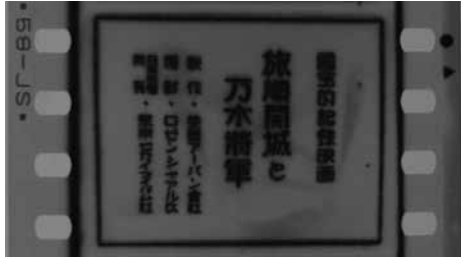


図2 ②-3國宝(16mmP)の複製基素材35mmDN(フィルム左側のエッジに刻印されているフィルムストックFUJI「58-JS」から、同ネガが1958年頃に作成されたことが分かる)

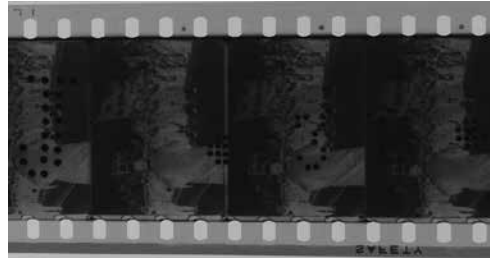


図3 35mmDN上の検閲番号「J38」

好洋により1924年頃に設立されたセカイフィルム社が<sup>18)</sup>、内務省の検閲に「再」申請した可燃性ポジを基に作成されたフィルムであると推定できる(本文末の「日露戦争記録映画検閲リスト」における「J-38」欄を参照)。

こうして『國宝的記録映画 旅順開城と乃木將軍』の1935年公開時の長さを同定したことにより、この35mmDNから16mmへ縮小した上映用プリント②-3國宝(J38)(18分)を軸にして、NFCに現存する日露戦争記録映画群の中で最長のバージョンとなっている②-1國寶・最長版(谷版)(35mmP、24分)及び、同バージョンと類似した②-2國寶(谷版)(16mmP、22分)両フィルムに、②-3國宝(J38)とは異なる別の素材が接合されていることが明らかになる。②-3國宝(J38)には『旅順の降伏』前半部分が「U-1→4→6→12→7→8→10→11→13→15→12」の順に含まれているだけでなく(①NFC旅順には確認できなかったU-13「破壊されたる二龍山砲台の光景」[図4]及びU-15「大島大將の水雷検閲」[図5]を含む)、後半部分が「U-17→18→19→20→21→23」の順に含まれているが、②-1國寶・最長版(谷版)および②-2國寶(谷版)の両フィルムにおいては、それらが恣意的にシャッフルされている(表3、「『旅順の降伏』のフタージが登場する順序」を参照)。さらに、②-1國寶・最長版(谷版)と②-2國寶(谷版)に見られる「敵将クロバトキン・・・」以下の中間字幕の書体が②-3國宝(J38)のそれとは明らかに異なっていることから(次頁、図6)、両フィルムは、何者か(おそらくは同プリントの所有者であった元・映画説明



図4 U-13「破壊されたる二龍山砲台の光景」



図5 U-15「大島大將の水雷検閲」

者の谷天郎)が本篇とは異なる奉天攻撃の様子を再現したフッテージを接合したフィルムであると同定できるのである。

また、メインタイトル上の右側に見られる国宝の「宝」の字に着目すると、②-1「國寶・最長版」(谷版)と②-2「國寶」(谷版)では旧字体になっているのに対し(図7)、②-3「國寶」(J38)のそれは新字体となっている(前頁、図2)。その理由は、1935年にセカイフィルム社が『國寶的記録映画 旅順開城と乃木將軍』というメインタイトルを付して再検閲を申請(検閲番号: J38)した前後に、それらが差し替えられたためである(「撮影」者の名前も「ロゼンシャル氏」から「ロゼン・シャル氏」へと改訂されている)。ここで改めて『映画検閲時報』を参照すると、セカイフィルム社が最初に『旅順開城と乃木將軍』の検閲を申請したのは、計四度の申請を行った1932年に遡ることが分かる。そして、最初の申請時には駒田好洋の本名である「駒田萬次郎」(検閲番号「G3653」:新)の名義で申請が行われ、続く二度目の申請においても「駒田萬次郎」(G4227:複2)の名義が使用されたのに対し、三度目の申請では「セカイフィルム社」(G9427:複3)の名義が採用されている。四度目が同じ「セカイフィルム社」名義として「新」規の申請となっていることから、この四度目の申請時に旧字体の「寶」から新字体の「宝」のバージョンへ差し替えられたか、あるいは、今日的な感覚ではやや不自然であるものの、1935年にセカイフィルム社名義で行われた「J17740」の「新」規申請時に新字体から旧字体のバージョンへ差し替えられたかのいずれかであろう<sup>19)</sup>。

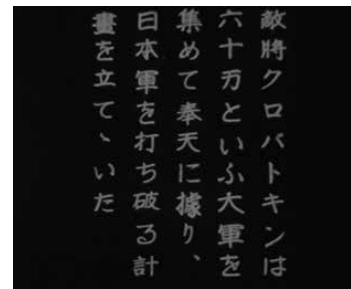


図6 ②-3「國寶」(J38)の中間字幕の書体と異なる「敵將クロバトキン・・・」以下の書体

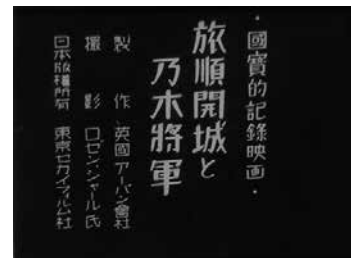


図7 ②-1「國寶・最長版」(谷版)と②-2「國寶」(谷版)のメインタイトル

### 『日露戦争記録』—「映画の歴史を見る会」で上映された可燃性染色ポジ

文部省芸術祭執行委員会及び国立近代美術館フィルムライブラリーの主催で、1954年11月8日に開催された上映企画「映画の歴史を見る会—明治後期から大正大震災以前まで」(協賛: 講談弁友会、映画芸術保存協会、東京新聞社)<sup>20)</sup>において、様々な日露戦争記録映画のフッテージが接合されたフィルムが、『日露戦争記録』(メインタイトルは欠落)と題して上映された<sup>21)</sup>。フィルムセンター元主幹の鳥羽幸信(1916-1992)により1988年に寄贈を受けた同35mm可燃性染色ポジを基に作成した③鳥羽版35(略称)では、以下の5つのまとまりを持つ場面が展開する。



「満洲戦蹟保存會が1921年10月に建立した石碑」のフッテージ (図8)



「乃木・ステッセル両將軍らの水師嘗會見」(『旅順の降伏』の後半部分:U-17→18→19→20→21→23→20) (図8)



「戦禍の奉天市街」



「米国ポーツマスにおける講和會議に現れる歴史上の人物や情況」(検閲番号: D 13120、図9) (図10)



「三宅坂參謀本部前で、明治天皇の馬車を群衆が歓迎する実景の場面」

本編の中央部分に接合されている一連の場面「米国ポーツマスにおける講和會議に現れる歴史上の人物や情況」の中間字幕上に、直接穿孔された検閲番号「D 13120」(図9)は、この部分のフッテージが、1929年に大阪フィルム商会が再検閲申請を行った『明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物 短縮篇』に由来していることを示唆している<sup>22)</sup>。昨年に開催されたNFCの上映企画「発掘された映画たち 2014」においては、③鳥羽版35がかつて「映画の歴史を見る会」において上映されたという歴史的経緯が明らかになっていなかったため、同ボジを『明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物 短縮篇』と題して上映した。しかし、通常はメインタイトル直後に穿孔されている検閲番号「D13120」を含むフッテージが、本篇の中央部分に接合されている③鳥羽版35のような場合は、部分で全体を総称するのではなく、当該フィルムがたどってきた歴史的経緯を踏まえ、『日露戦争記録』という呼称を与えるのが適切であろう。

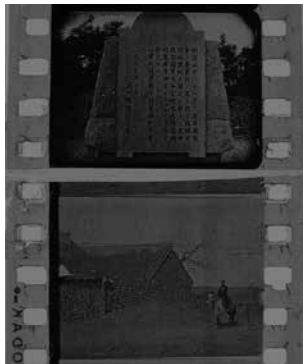


図8 ③「鳥羽版35」の複製基素材である可燃性染色ボジに残るテープ・スライズ痕(満洲戦蹟保存會が1921年10月に建立した石碑のフッテージに水師嘗會見の場面が繋ぎ込まれている)

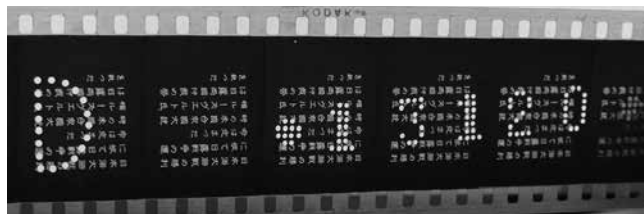


図9 中間字幕に直接穿孔された検閲番号「D13120」



図10 「米国ポーツマスにおける講和會議に現れる歴史上の人物や情況」を示す場面の一部において、染色の色合いと字幕の書体が異なるゲバルト社製のフィルム「GEVAERT BELGIUM」が挿入されている<sup>23)</sup>

## 『國宝映画 日露戦争 回顧録』—陸軍の凱旋状況を伝える9.5mmの日露戦争記録映画

NFCに現存する9.5mmの『國宝映画 日露戦争 回顧録』を基に、ブローアップによるネガから仕上げた35mmポジ(略称:④9.5mm)には、検閲番号の痕跡が残っていないため、その来歴をたどる事は容易でない(④9.5mmには、『旅順の降伏』の後半部分が含まれている[U-18→19→23→21])。しかし、ここで『映画検閲時報』を繙くと、④9.5mmの基素材は、1932年に日本活動写真株式会社(現日活)が製作し、伴野文三郎が検閲申請を行った9.5mmの『日露戦争回顧録』(検閲番号「G4395」)に由来すると推定できる<sup>24)</sup>。1922年にフランス・パテ社が開発した9.5mmフィルム(パテベビー)の輸入者でもあった伴野は、最初の検閲申請にあたる1932年から1940年にかけて計8度の検閲申請を行い、この間に9.5mm版および16mm版の普及、販売に努めていた。

この④9.5mmが重要なのは、メインタイトル、中間字幕、及び「終」(エンドタイトル)が残存していることに加え、日露戦争後の陸軍の凱旋状況を伝えるフッターズをはじめ、その他の日露戦争記録映画には見られない独立したフッターズを数多く含んでいる点にある(図11)。具体的には、吉澤商店のカタログ『活動写真器械同フィルム(連続写真)定価表』(1907年11月改正)において、「陸軍の凱旋及歓迎」と分類された16種のフィルムに由来するフッターズが、同ポジに含まれている可能性がある。「陸軍の凱旋及歓迎」に含まれている「満洲軍総司令部大山元帥及児玉大将等ノ凱旋第一 新橋へ到着ノ実況」「第一軍(黒木軍)司令部ノ凱旋」「第二軍(奥軍)司令部ノ凱旋」「第三軍(旅順攻囲軍)司令部ノ凱旋 第一、食堂前及行列 第二、乃木大将邸」「第四軍(野津軍)司令部ノ凱旋」と記載された5つの場面の梗概と、④9.5mmに含まれている当該フッターズの見た目が概ね一致しているのである。なお④9.5mmには、上記の『旅順の降伏』の後半部分と陸軍の凱旋状況を伝える場面に加え、最後に米国ポーツマス講和会議関連のフッターズが接合されている。

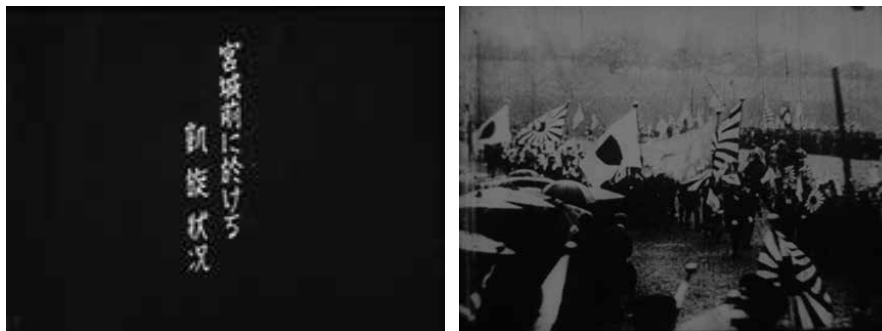


図11 ④9.5mmが伝える日露戦争戦勝後の凱旋状況

## 『実戦記録映画 懐ひ起せ 日露大戦』—海外で製作された再現映画のフッターズ

『実戦記録映画 懐ひ起せ 日露大戦』は、2014年度にプラネット映画資料図書館の協力を得て、新規収蔵をした日露戦争記録映画(略称:⑤日露大戦)であり、『旅順の降伏』の2場面のフッターズを含んで

いる(U-8→12)。**⑤日露大戦**の複製基素材は35mm可燃性染色ポジであるが、現時点では、メインタイトル及びその直後に現れる中間字幕とそれ以外のフッターが、はたして公開時から同ポジに含まれていたものであるか確認が持っていない。なぜなら、**⑤日露大戦・冒頭**の検閲番号「D 13120」(杉本商会製作、765m)の痕跡が残る中間字幕と、その直後に現れる中間字幕の書体が明らかに異なっている上に、フッターにより画調が大きく変化しているからである。さらに、同作品には『ロシア軍と日本軍の前哨戦』(1904年、エジソン社、エドウィン・S・ポーター撮影)をはじめ、海外で製作されたと思われる様々な日露戦争の再現映画のフッターが繋ぎ込まれているのである。

また、本篇の長さも検閲記録上は756mであるが、**⑤日露大戦**の実長は167mに過ぎないため、書体の異なる中間字幕の後に続く全フッターが、別作品から接合された可能性さえ残る。この点については、海外のフィルム・アーカイブが所蔵する日露戦争記録映画の残存調査を継続的に実施する(前掲表1)とともに、**⑤日露大戦**の中に『ロシア軍と日本軍の前哨戦』以外の日露戦争記録映画のフッターがどれだけ含まれているかについて、さらに検証を続けていく必要があるだろう。

### 『第一篇 日露戦役 追懐ノ巻』—日本人カメラマンが撮影した可能性のある「品川出発」の場面

『第一篇 日露戦役 追懐ノ巻』は、『映画検閲時報』における津聯隊区(検閲番号「H40」)、在郷軍人会京都支部(同「H143」)、在郷軍人会岐阜支部(同「H868」)、帝国在郷軍人会(同「H2286」「J4780」)、陸軍省新聞班(同:「J6155」)という検閲申請者名を見る限り、製作者である満洲教育映畫協會が、主として軍関係者向けに、当時現存していた日露戦争記録映画を再構成したフィルムであると推定できる。アメリカから返還された可燃性ポジを基に作成した、NFC所蔵35mmDN(実長404.64m)および16mmフィルム(略称:⑥返還・追懐)に刻印されている検閲番号「H143」は、両フィルムの複製基素材が、在郷軍人会京都支部により1933年に検閲申請に出された可燃性ポジ(414m)であることを示唆している。また、⑥返還・追懐にはメインタイトルと二種類の書体が混在する中間字幕、そして「終」(エンドタイトル)が残存しており、公開時のもこの形で上映されていたと推定されることから、当時は字幕の書体が異なるフッターを含む日露戦争記録映画も一般に流通していたことが分かる。

⑥返還・追懐にも『旅順の降伏』のフッターが数多く再利用されているが(U-1→4→3→7→2→15→6→10→8→10→11→12→/U-17→18→19→20→23)、④9.5mmと同様に、⑥返還・追懐にしか見られない独自のフッターが確認できる。とりわけ、中間字幕「皇軍の一部品川を出発す」に続く一連の場面(図12)のフッターの並びは、吉澤商店のカタログ『幻燈器械及映画並ニ活動写真器械及附属品定価表』(1905年12月)所収の日露戦争記録映画「我軍隊ヲ乗セタル汽車新橋ヲ出発シ品川通過ノ実況」(150尺)の梗概の内容と完全に一致している。

軍隊ノ新橋停車場ニ到着ナスヤ直チニ汽車ニ乗リ夫レヨリ軍馬等ヲ積ミ込ミ愈々新橋駅ヲ出発シテ今品川ノ海岸ヲ通過ナスニ当リ乗車中ノ軍隊ハ多クノ見送り人ニ対シテ帽子旗等ヲ振り答礼ヲナス汽車ハ黒煙ヲ立ツテ進行ナスノ有様ハ見ル毎ニ征露ノ軍隊ヲ送ルニ異ナラズ見ル人思ハズ喝采シテ万歳ノ声天地ニ振動

## セル愉快極レルノ好写真ナリ<sup>25)</sup>

これらのフッテージが、日本人カメラマンにより撮影されたものであることを直接裏付ける資料は確認できていないものの、吉澤商店のカタログが今に伝える「我軍隊ヲ乗セタル汽車新橋ヲ出発シ品川通過ノ実況」は、そのような期待を抱かせる重要なフッテージである。⑥返還・追懐には、その他にも日本軍凱旋の場面、踊りや玉乗りで熱烈に兵士を歓迎する日本人たちを捉えた場面等が確認できる。



図12 中間字幕「皇軍の一部品川を出発す」に続く諸場面

## おわりに

以上の調査結果をまとめよう。まず、NFCが所蔵する①NFC旅順、②-1國寶・最長版(谷版)、②-2國寶(谷版)、②-3國寶(J38)、③鳥羽版35、④9.5mm、⑤日露大戦、⑥返還・追懐の8本のフィルム全てにおいて、ローゼンタール撮影『旅順の降伏』のフッテージが改変ないし接合されていることが明らかになった(但し、U-14「要塞内の俘虜」、U-16「降伏書の調印せられたる支那民屋」のパノラマ、U-22「捕虜満載の汽車旅順を發す」、U-24「日章旗旅順港頭に翻る」という計4つの場面は現存していない)。つまり現時点では、オリジナル版の完全な復元は見込めないものの、ダイジェスト版(U-1～24)に近い形で最長版を作成することは可能である。

①NFC旅順は、冒頭の12場面だけとはいえ、『旅順の降伏』・ダイジェスト版の形をそのまま留めており、②-3國寶(J38)についても、『國寶的記録映画 旅順開城と乃木將軍』が1935年に公開された当時の形を留めている。NFCに現存する日露戦争記録映画のうち、公開当時の形を留めながら、他と重複のない独立したフッテージを数多く含んでいるのは、④9.5mmと⑥返還・追懐である。両フィルムには、吉澤商店のカタログに「陸軍の凱旋及歓迎」や「最近日露戦争之部」と分類されているフッテージが再利用されている可能性が高く、その妥当性をめぐって今後の継続的な調査・研究が必要であろう。

ここで日露戦争記録映画群に含まれる全フッテージを改めて見渡すと、日本人カメラマンが実際に戦地で撮影をしたフッテージがひとつも現存していないことに気づかされる。この動かし難い事実が、ローゼンタール撮影『旅順の降伏』のフッテージの再利用を促した一番大きな理由だと考えられる。実際、本文末の「日露戦争記録映画検閲リスト」を参照すると、過去に検閲を受けた日露戦争記録映画群が、戦前

の日本映画としては異例とも言うべき残存率の高さを示している。これは第一に、『旅順の降伏』のフッテージを含む8本のフィルムが、無声映画時代からトーキー映画の台頭する時代にかけて、大学や博物館のような教育・研究機関、陸軍省や海軍省といった軍事機関、Mカンマー商会や大阪フィルム商会といった映画を取り扱う公社、および新聞社など極めて多くの機関により、立ち代わり様々な形状のフィルムに複製され、改変および接合が繰り返されてきたからである。このように、ある一本の映画が現実の記録とみなされ、それがさらに編集され、ある種のプロパガンダとして再利用される一連のプロセスは、その後の文化・記録映画から現在の戦争ドキュメンタリーに至るまで繰り返し見られるものである。

また、この残存率の高さに関する第二の理由として、映画説明者が果たした役割も見逃せない。元・映画説明者から寄贈を受けたフィルムが2本(②-1 國寶・最長版[谷版]、②-2 國寶[谷版])存在するだけでなく、『國寶的記録映画 旅順開城と乃木將軍』がNFCに現存する可能性を高めたのは、映画草創期に日露戦争記録映画の映画説明を行っていた駒田好洋自身が、『旅順の降伏』の改変を繰り返して、度重なる検閲申請を行っていたからであろう。

最後に、今回の日露戦争記録映画群のカタロギング作業を通じて浮上した課題について述べる。NFCが所蔵する個々のフィルムの特徴に関する調査、分析を終えたいま、より精緻なカタロギングを行うには、映像の内容に関する分析を進めることが不可欠である。たとえば、『旅順の降伏』における「日本軍の横濱出發」(U-1)の場面では、なぜオリジナル版の「日本軍の東京出發」(包囲-1)の場面が使用されなかったのか、あるいは、現存する日露戦争記録映画の個々のフッテージを誰が、いつ、どこで撮影したのかを明らかにするには、多くの研究者の知見が必要であろう。軍事研究者であれば、日露戦争記録映画に登場する兵士の軍服から、様々な武器や戦艦の種別に至るまで同定することができるに違いない。今後の日露戦争記録映画のさらなる調査、分析にあたっては、共同研究により解明すべき多くの課題が横たわっている。

(大傍正規／東京国立近代美術館フィルムセンター研究員)

#### 補記

検閲時報の調査については、公益財団法人三菱財団の平成25年度学術研究助成による「映画検閲資料のデータベース化による日本映画研究の基盤形成」(代表者:板倉史明)の研究成果の一部を活用した。また、検閲時報の検索と確認にあたって頂いたNFC映画室事務補佐員のみなさん、日露戦争記録映画フィルムの物理的調査に協力して頂いた技能補佐員のみなさんに、ここに記して感謝申し上げます。

本稿は、科学研究費補助金(若手研究(B)、課題番号23720086)の成果の一部である。

日露戦争記録映画検閲リスト

(備考欄：新…新規の検閲申請 再…再検閲申請 複：複数の検閲申請 免…検閲手数料の免除)

検閲番号	題名	巻数	m数	製作者	申請者	拒否又は制限等	備考
大正14年(1925)							
○ 78	旅順開城実況	1	275		教育総監部		新免
436	日露役旅順攻囲軍	1	325	大阪フィルム商會	野々村浅太郎		新
○ 509	旅順開城	1	310	岡本洋行	法政大学		新
○ 1465	旅順開城	1	287	岡本洋行	陸軍省		新免
○ 1844	旅順開城	1	312	岡本洋行	同左		新
○ 2747	旅順開城	1	309	岡本洋行	同左		複1
○ 3119	旅順開城	1	311	岡本洋行	宮崎県		新免
○ 3336	旅順開城	1	310	岡本洋行	栃木県		新免
4375	明治大帝と乃木將軍	1	98	岡本洋行	同左		新
○ 5303	旅順開城	1	323	英国アーバン社	Mカシー商会		新
○ 5390	旅順開城	1	310	岡本洋行	陸軍省		複1免
5391	先帝陛下の幽篋乃木將軍面影	1	63	岡本洋行	陸軍省		新免
○ 5696	旅順開城	1	308	岡本洋行	海軍省		新免
5938	先帝陛下及乃木將軍の面影	1	64	東京日々新聞社	同左		新免
○ 5939	旅順開城	1	311	東京日々新聞社	同左		新免
6638	明治大帝と乃木將軍	1	64	岡本洋行	東京日々新聞社		複1免
○ 6639	旅順開城	1	311	岡本洋行	東京日々新聞社		複1免
○ 6788	旅順開城	1	268	岡本洋行	岸本與		新
大正15年・昭和元年(1926)							
○ 8122	旅順開城	1	310	英国アーバン社	岡本洋行		新
○ 9620	旅順開城	1	309	岡本洋行	大阪毎日新聞社		複2免
○ 9698	旅順開城	1	310	第三軍司令部附活動写真真班	岐阜連隊区司令部		新免
9635	ポーツマス日露講和会議	1	250	大阪毎日新聞社	同左		新免
○ A1418	旅順開城	1	310	第三軍従軍写真真班	岡蔵		新
○ A4595	旅順開城	1	285	岡本洋行	教育総監部		新免
○ A4605	旅順開城	1	250	第三軍従軍写真真班	陸軍活動写真研究会		再
○ A5995	旅順開城	1	305	岡本洋行	福島県		新免
○ A6575	旅順開城	1	308	岡本洋行	陸軍省		新免
昭和2年(1927)							
B374	明治大帝と乃木將軍	1	64	岡本洋行	鹿児島高等農林学校		新免
B379	乃木將軍国葬と御大葬当時の東京市	1	219	小松商会	同左		再
○ B5186	旅順開城実況	1	282	岡本洋行	日本美髮会本部		再
○ B6389	旅順開城	1	309	岡本洋行	同左		新
B8141	旅順開城講和談判及觀兵式	1	422	杉本商会	同左		再
B8549	旅順の回想	1	179	大連プロダクション	松崎澄太郎		再
○ B8822	旅順開城	1	322	岡本洋行	同左		新
B11611	旅順開城と乃木將軍	3	598	大連プロダクション	藤坂謙三		新

	検閲番号	題名	巻数	m数	製作者	申請者	拒否又は制限等	備考
昭和3年(1928)								
○	C1694	旅順開城	1	311	岡本洋行	同左		免
○	C1852	旅順開城	1	304	岡本洋行	同左		複2
○	C2710	旅順開城	1	32 (※ママ)	岡本洋行	同左		複3
○	C4572	旅順開城	1	311	岡本洋行	同左		複4
	C6925	明治大帝と乃木將軍の倂	1	64	岡本洋行	同左		新
昭和4年(1929)								
○	D141	旅順開城	1	307	大阪毎日新聞社	同左		免
○	D142	旅順開城	1	300	大阪毎日新聞社	同左		免
	D192	明治大帝の乃木將軍の面影	1	170	大阪毎日新聞社	同左		免
○	D7548	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	242	大阪フィルム商会	同左		新
○	D7679	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	226	大阪フィルム商会	中塚傳五郎		複1
○	D7885	旅順開城	1	310	岡本洋行	帝國在郷軍人会 岐阜支部		免
○	D8342	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	230	大阪フィルム商会	中塚傳五郎		複2
○	D8343	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	270	大阪フィルム商会	中塚傳五郎		複3
○	D8344	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	271	大阪フィルム商会	中塚傳五郎		複4
○	D8475	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	231	大阪フィルム商会	中塚傳五郎		複3
○	D8476	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	230	大阪フィルム商会	中塚傳五郎		複4
○	D9113	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	307	岡本洋行	アクメ商会		再
○	D12710	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	220	大阪フィルム商会	同左		新
●	D13120	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	157	大阪フィルム商会	同左		新
昭和5年(1930)								
○	E647	旅順開城	1	312	大阪毎日新聞社	同左		免
○	E975	乃木將軍と旅順陥落	1	60	本庄嘉三郎	同左	16ミリ	新
	E2671	日露大戦争	1	305	大阪フィルム商会	松竹キネマ株式会社		新
	E2740	日露戦争	3	792	帝国キネマ演芸株式会社	同左		新
	E2741	日露戦争	3	786	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複1
	E2742	日露戦争	3	787	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複2
	E2743	日露戦争	3	787	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複3
	E2744	日露戦争	3	789	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複4

検閲番号	題名	巻数	m数	製作者	申請者	拒否又は制限等	備考
E2745	日露戦争	3	789	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複5
E2746	日露戦争	3	790	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複6
E2747	日露戦争	3	789	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複7
E2748	日露戦争	3	781	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複8
E2819	日露戦争	3	790	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複(*ママ)
E2820	日露戦争	3	790	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複10
E2821	日露戦争	3	785	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複11
E2921	日露戦争	3	788	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複12
E2922	日露戦争	3	785	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複13
E2923	日露戦争	3	784	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複14
E2924	日露戦争	3	782	帝国キネマ演芸株式会社	同左		複15
E2943	新篇日露大戦争	1	321	大阪フィルム商会	松竹キネマ株式会社		新
○ E4283	日露戦争を懐ふ	6	1575	桜映画製作所	陸軍省		免
○ E4871	乃木將軍と旅順陥落	1	60	本庄嘉三郎	同左	16ミリ	複2
○ E5006	日露戦争を懐ふ	6	1571	桜映画製作所	陸軍新聞班長		免
○ E5062	改訂日露戦争を懐ふ	5	1518	桜映画製作所	陸軍新聞班長		免
○ E5063	改訂日露戦争を懐ふ	5	1521	桜映画製作所	陸軍新聞班長		免
○ E5131	改訂 明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	200	大阪フィルム商会	同左		新
○ E6786	旅順開城	1	311	Mカシー社	津連隊司令部		免
○ E8981	乃木將軍と旅順陥落	1	59	アローグラフ	同左	16ミリ	新
○ E12165	乃木將軍と旅順陥落	1	59	アローグラフ社	本庄嘉三郎	16ミリ	新
昭和6年(1931)							
○ F3413	旅順開城	1	311	岡本洋行	岡本洋行		新
F4713	旅順と乃木	2	450	陸軍省新聞班	同左		免
F4714	乃木將軍の正影	1	62	陸軍省新聞班	同左		免
○ F4813	旅順開城A篇	1	288	岡本洋行	陸軍省新聞班		免
○ F4814	旅順開城B篇	1	273	岡本洋行	陸軍省新聞班		免
○ F5385	旅順開城	1	302	岡本洋行	在郷軍人会水戸支部		免
○ F6898	旅順開城	1	307	岡本洋行	東京科学博物館		免
F8345	日露大戦役	5	609	杉本フィルム商会	同左		新
F9861	縮小版 明治三十七八年日露戦争	1	236	大阪フィルム商会	同左		新
○ F10044	改訂明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	183	大阪フィルム商会	中塚傳五郎		新



	検閲番号	題名	巻数	m数	製作者	申請者	拒否又は制限等	備考
	F12056	乃木將軍と旅順陥落	1	609	アローグラフ社	同左	16ミリ	新
○	F13910	第一篇 日露戦役 追懐の巻	4	115	小堀寅次郎	陸軍省新聞班		免
	F13911	第二篇 滿蒙に於ける我權益の巻	2	498	小堀寅次郎	陸軍省新聞班		免
	F13912	大日本国民教育映画読本	1	29	小堀寅次郎	陸軍省新聞班		免
	F13913	支那の軍隊	1	322	小堀寅次郎	陸軍省新聞班		免
	F13914	第四篇 張学良豪華の巻	2	373	小堀寅次郎	陸軍省新聞班		免
	F13915	支那の風俗風景	1	164	小堀寅次郎	陸軍省新聞班		免
	F13916	第五篇 支那の排日の巻	2	397	小堀寅次郎	陸軍省新聞班		免
○	F14333	第一篇 日露戦役 追懐の巻	1	142	小堀寅次郎	同左		新
昭和7年(1932)								
○	G3495	旅順開城	1	315	岡本洋行	大阪毎日新聞社		免
○	G3496	旅順開城	1	299	岡本洋行	大阪毎日新聞社		免
○	G3653	旅順開城と乃木將軍	1	312	英國アーバン會社	駒田萬次郎		新
○	G4227	旅順開城と乃木將軍	1	307	英國アーバン會社	駒田萬次郎		複2
●	G4395	日露戦争回顧録	1	100	日本活動寫眞株式會社	伴野文三郎	9.5ミリ	新
○	G5414	旅順開城と乃木將軍	1	308	英國アーバン會社	セカイフィルム社		複3
●	G5710	懐ひ起せ日露大戦	3	765	杉本商會	松本商會		新
○	G6237	旅順開城	1	281	英國アーバン會社	岡本洋行		新
	G8879	日露條約成るの日	1	205	大阪毎日新聞社	同左		免
○	G9427	旅順開城と乃木將軍	1	310	英國アーバン會社	セカイフィルム社		新
○	G14995	明治大帝の御英姿及日露戦争の中心人物	1	220	大阪フィルム商會	武山興市		再
	G15661	日露戦争凱旋	1	121	大阪毎日新聞社	同左		免
○	G15686	旅順開城甲種	1	274	岡本洋行	大阪毎日新聞社		同
昭和8年(1933)								
○	H40	日露戦役追懐の巻	2	414	滿洲教育映畫協會	津聯隊区		免
●	H143	日露戦役追懐の巻	2	414	滿洲教育映畫協會	在郷軍人会京都支部		免
○	H868	日露戦役追懐の巻	2	414	滿洲教育映畫協會	在郷軍人岐阜支部		免
○	H2286	日露戦役追懐の巻	2	415	滿洲教育映畫協會	帝国在郷軍人会		免
	H5586	旅順開城實況	1	131	岡島新聞舗	同左	16ミリ	新
	H11024	日露戦争	3	642	帝国キネマ演芸株式会社	新興キネマ株式会社		新
○	H12446	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	201	大阪フィルム商會	セカイフィルム社		新
○	H12548	日露戦争回顧録	1	95	伴野商會	ホームムービーライブラリー	16ミリ	新
昭和9年(1934)								
○	I3690	旅順開城	1	296	陸軍従軍寫眞班	海軍々事普及部		免
昭和10年(1935)								
●	J38	旅順開城と乃木將軍	1	309	英國アーバン社	セカイフィルム		再
	J2331	日露戦後回顧三十年	3	794	新興キネマ株式会社	同左		新

	検閲番号	題名	巻数	m数	製作者	申請者	拒否又は制限等	備考
	J2476	[発声フィルム式]日露戦後回顧三十年	3	776	新興キネマ株式会社	同左		新
	J2559- J2662	[発声フィルム式]日露戦後回顧三十年	3	776	新興キネマ株式会社	同左		複1～4
	J2579	[発声フィルム式]改訂 日露戦後回顧三十年	3	512	新興キネマ株式会社	同左		複1
	J2580	[発声フィルム式]改訂 日露戦後回顧三十年	3	512	新興キネマ株式会社	同左		複2
○	J2588	改訂 明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	118	大阪フィルム商會	芹澤徳榮		新
	J2638	日露戦後回顧三十年	3	775	新興キネマ株式会社	同左		複5
	J2694	縮小版 明治三十七八年日露戦争	1	236	大阪フィルム社	芹澤徳榮		新
○	J2806	旅順開城 A篇	1	259	岡本洋行	陸軍省新聞版		免
○	J2807	旅順開城 B篇	1	266	岡本洋行	陸軍省新聞版		免
○	J2830	改訂 明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	230	大阪フィルム商會	谷岡佐吉		新
	J2831	改訂 日露大戦史	4	646	大阪フィルム商會	谷岡佐吉		新
	J2842	発声フィルム式 改訂 日露戦役回顧三十年	3	512	新興キネマ株式会社	在郷軍人会松本支部 小野賢三郎	16ミリ	複3
○	J2875	日露戦争回顧録	1	86	日本活動写真株式会社	西村憲治	16ミリ	免
●	J2997	日露戦争三十周年記念極東戦線一万里	4	960	松竹キネマ株式会社	同左		新
○	J3007	日露戦争を懐ふ	6	1569	櫻映画社	陸軍省新聞班		免
○	J3008	日露戦争を懐ふ	6	1569	櫻映画社	陸軍省新聞班		免
○	J3009	改訂 日露戦争を懐ふ	5	1515	櫻映画社	陸軍省新聞班		免
○	J3010	改訂 日露戦争を懐ふ	5	1515	櫻映画社	陸軍省新聞班		免
○	J3011	改訂 日露戦争を懐ふ	5	1515	櫻映画社	陸軍省新聞班		免
○	J3012	日露戦争を懐ふ 旅順編	2	440	櫻映画社	陸軍省新聞班		免
○	J3014～ 3022	日露戦争三十周年記念極東戦線一万里	4	960	松竹キネマ株式会社	同左		複1～9
○	J3031	旅順開城	4	248	セカイ社	陸軍省新聞班		免
○	J3052	日露戦争三十周年記念極東戦線一万里	4	959	松竹キネマ株式会社	同左		複10
	J3891	[発声フィルム式]日露戦役回顧三十年	3	775	新興キネマ株式会社	同左		複5
○	J4237	明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物	1	221	大阪フィルム商會	セカイフィルム社		新
	J4283	乃木將軍の面影	1	60	陸軍省新聞班	同左		免
○	J4780	日露戦役追懐	2	416	滿洲教育映畫協會	帝国在郷軍人会		免
○	J6155	改訂 日露戦役 追懐の巻	1	402	滿洲教育映畫協會	陸軍省新聞班		免
○	J6594	[発声フィルム式]日露戦捷(ママ)三十周年記念極東戦線一万里	4	961	松竹キネマ株式会社	陸軍省新聞班		免
○	J8318	日露戦争回顧録	1	85	日本活動写真株式会社	伴野文三郎	9.5ミリ	新
○	J13503	改訂 旅順開城	1	206	英国アーバン社	大阪毎日新聞社		免
○	J13504	旅順開城と乃木將軍	1	309	英国アーバン社	大阪毎日新聞社		免
○	J13599	日露戦争回顧録	1	85	日本活動写真株式会社	伴野文三郎	9.5ミリ	新
○	J13672	旅順開城と乃木將軍	1	122	英国アーバン社	加藤敏一	16ミリ	新

	検閲番号	題名	巻数	m数	製作者	申請者	拒否又は制限等	備考
○	J17740	旅順開城と乃木將軍	1	309	英国アーバン社	セカイフィルム社		新
○	J18929	旅順開城	1	304	岡本洋行	丸茂忠雄		免
	J19586	日露戦役回顧	1	140	海軍省	海軍省軍事普及部		免
昭和11年(1936)								
○	K2745	[發聲フィルム式]三月十日	1	3	写真化学研究所	東京朝日新聞社		免
○	K3404	旅順開城 甲種	1	264	岡本洋行	大阪毎日新聞社		再
	K3840	日露戦争凱旋	1	114	大阪毎日新聞社	同左		免
○	K18993	[發聲フィルム式]不滅乃木	4	1125	セカイフィルム社	同左		新
○	K20980	日露戦争回顧録	1	82	日本活動寫眞株式会社	伴野文三郎	16ミリ	新
○	K22355	[發聲フィルム式]不滅乃木 A篇	4	1215	セカイフィルム社	帝國軍人後援會		免
昭和12年(1937)								
○	L3583	[發聲フィルム式]乃木將軍	10	2297	大秦発声映画株式会社 社経営日活撮影所	同左		新
○	L4385	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木	5	1220	セカイフィルム社	同左		複1
○	L4386	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木	5	1220	セカイフィルム社	同左		複2
	L4630	旅順開戦実況	1	131	岡島新聞舗	同左	16ミリ	新
○	L4788	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木	5	1220	セカイフィルム社	同左		複3
○	L4789	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木	5	1220	セカイフィルム社	同左		複4
○	L4790	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木	5	1220	セカイフィルム社	同左		複5
	L6038	[發聲フィルム式]乃木大将の倂	1	41	東京日日新聞社	同左		新
○	L7909	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木	5	1222	セカイフィルム社	同左		複6
○	L8670	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木	5	1220	セカイフィルム社	同左		複7
	L12450	憶出の乃木將軍	1	102	深田商会	同左	16ミリ	免
	L18504	日露戦争の回顧	1	95	マーベルグラフ社	大同商事映画社	16ミリ	免
○	L24847	日露戦争回顧録	1	85	日本活動寫眞株式会社	伴野文三郎	9.5ミリ	新
○	L28280	旅順開城	1	296	英国アーバン社	海軍省		免
○	L35466	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木 6	5	1216	セカイフィルム社	同左		免
○	L36599	日露戦争回顧録	1	84	日本活動寫眞株式会社	伴野文三郎	9.5ミリ	複1
昭和13年(1938)								
○	M6881	旅順開城	1	258	英国アーバン社	陸軍省新聞班		免
○	M9480	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木 8	5	1220	セカイフィルム社	広島鉄道局		免
○	M20547	[發聲フィルム式]新篇 不滅乃木 9	5	1220	セカイフィルム社	広島鉄道局		免
昭和14年(1939)1月～9月								
○	N4664	日露戦争回顧録 第一号	1	120	日活	小西六本店	16ミリ	免
○	N14140-14144	改訂 不滅乃木 第一号～第五号	2	226	セカイフィルム社	小西六本店	16ミリ	新
○	N14648	改訂 不滅乃木 第六号	2	226	セカイフィルム社	小西六本店	16ミリ	複
○	N14649	改訂 不滅乃木 第七号	2	226	セカイフィルム社	小西六本店	16ミリ	複
○	N15422	改訂 不滅乃木 第八号	2	226	セカイフィルム社	小西六本店	16ミリ	免
○	N22633	改訂 不滅乃木 第九号	2	226	セカイフィルム社	小西六本店	9.5ミリ	複
○	N32504	改訂 不滅乃木 第十号	2	226	セカイフィルム社	小西六本店	16ミリ	新

	検閲番号	題名	巻数	m数	製作者	申請者	拒否又は制限等	備考
○	N39399	旅順開城	1	305	岡本洋行	東京科学博物館		免
○	N40497-N40499	改訂 不滅乃木 第十一～十三号	2	226	セカイフィルム社	小西六本店	16ミリ	新
昭和14年(1939)10月～12月								
○	3985	改訂 不滅乃木 第十四号	2	226	セカイフィルム社	小西六本店	16ミリ	複
○	4075	新篇 不滅乃木 10	5	1176	セカイフィルム社			免2・新
○	8426	新篇 不滅乃木 11	5	1220	セカイフィルム社			免2・複
昭和15年(1940)								
○	1464	新篇 不滅乃木 12	5	1220	セカイフィルム社			免2複
○	7325	不滅乃木 A篇 1	4	1183	セカイフィルム社			免2新
○	10317	聖將乃木傳 1	1	290	セカイフィルム社			新
○	11409	新篇 不滅乃木 2	5	1200	セカイフィルム社			免2複
○	14128	新篇 不滅乃木 3	5	1146	セカイフィルム社			免2複
○	15691	聖將乃木傳 2	1	297	セカイフィルム社			複
○	15692	聖將乃木傳 3	1	297	セカイフィルム社			複
○	17693	聖將乃木傳 4	1	297	セカイフィルム社			複
○	17694	聖將乃木傳 5	1	297	セカイフィルム社			複
○	18636	聖將乃木傳 6	1	297	セカイフィルム社			複
○	18637	聖將乃木傳 7	1	297	セカイフィルム社			複
○	18638	聖將乃木傳 8	1	297	セカイフィルム社			複
○	18639	聖將乃木傳 9	1	297	セカイフィルム社			複
○	19674	聖將乃木傳 10	1	297	セカイフィルム社			複
○	19675	聖將乃木傳 11	1	297	セカイフィルム社			複
○	20612	聖將乃木傳 12	1	297	セカイフィルム社			複
○	20613	聖將乃木傳 13	1	297	セカイフィルム社			複
○	22758	新篇 不滅乃木 1	5	1101	セカイフィルム社			免2再
○	22769	日露戦争回顧録 1	1	82	日活	伴野商店	16ミリ	免2新
○	23238	新篇 不滅乃木 13	5	1193	セカイフィルム社			免2複
○	23406	聖將乃木傳 14	1	297	セカイフィルム社			複
○	23407	聖將乃木傳 15	1	297	セカイフィルム社			複
○	23408	聖將乃木傳 16	1	297	セカイフィルム社			複
○	23409	聖將乃木傳 17	1	297	セカイフィルム社			複
○	24261	聖將乃木傳 18	1	297	セカイフィルム <small>(※ママ)</small>			複
○	24326	聖將乃木傳 19	1	297	セカイフィルム社			複
○	24418	改訂 聖將乃木傳 1	1	302	セカイフィルム社			新
○	24419	改訂 聖將乃木傳 2	1	302	セカイフィルム社			複
○	24420	聖將乃木傳 20	1	297	セカイフィルム社			複
○	25215	聖將乃木傳 21	1	297	セカイフィルム社			複
○	25216	聖將乃木傳 22	1	297	セカイフィルム社			複
○	25718	聖將乃木傳 23	1	297	セカイフィルム社			複
○	25719	聖將乃木傳 24	1	297	セカイフィルム社			複
○	26600	聖將乃木傳 25	1	297	セカイフィルム社			複

	検閲番号	題名	巻数	m数	製作者	申請者	拒否又は制限等	備考
○	26601	聖將乃木傳 26	1	297	セカイフィルム社			複
○	26988	改訂 不滅乃木 1	2	226	セカイフィルム社	十字屋	16ミリ	新
○	27008	改訂 聖將乃木傳 3	1	302	セカイフィルム社			複
○	27009	改訂 聖將乃木傳 4	1	302	セカイフィルム社			複
○	27010	改訂 聖將乃木傳 5	1	302	セカイフィルム社			複
○	27011	改訂 聖將乃木傳 6	1	302	セカイフィルム社			複
○	27012	改訂 聖將乃木傳 7	1	302	セカイフィルム社			複
○	27013	改訂 聖將乃木傳 8	1	302	セカイフィルム社			複
○	27430	聖將乃木傳 27	1	297	セカイフィルム社			新
○	27431	聖將乃木傳 28	1	297	セカイフィルム社			複
○	27799	聖將乃木傳 29	1	297	セカイフィルム社			新
○	27799	聖將乃木傳 30	1	297	セカイフィルム社			複
○	28270	改訂 聖將乃木傳 9	1	302	セカイフィルム			免2複
○	28271	改訂 聖將乃木傳 10	1	302	セカイフィルム			免2複
○	28272	改訂 聖將乃木傳 11	1	302	セカイフィルム			免2複
○	28273	改訂 聖將乃木傳 12	1	302	セカイフィルム			免2複
○	28274	改訂 聖將乃木傳 13	1	302	セカイフィルム			免2複
○	28275	改訂 聖將乃木傳 14	1	302	セカイフィルム			免2複
○	28276	改訂 聖將乃木傳 15	1	302	セカイフィルム			免2複
○	28579	改訂 不滅乃木 16	2	226	セカイフィルム社	小西六	16ミリ	複
○	28738	新愛知版 聖將乃木傳	1	302	加藤敏一	佐野博敏		新
○	29023	聖將 乃木傳 31	1	297	セカイフィルム			複
○	29024	聖將 乃木傳 32	1	297	セカイフィルム			複
○	29844	聖將 乃木傳 33	1	297	セカイフィルム社			複
○	32035	聖將 乃木傳 34	1	297	セカイフィルム社			複
○	34812	聖將 乃木傳 35	1	297	セカイフィルム社			複
○	43861	新篇 不滅乃木 1	5	1220	セカイフィルム社	オールキネマ社		免2新
○	44585	新篇 不滅乃木 14	5	1172	セカイフィルム社			免2複
○	45773	不滅乃木 A 篇	4	1200	セカイフィルム社	帝國在郷軍人会本部		免1再
昭和16年(1941)								
○	8588	聖將乃木傳 1	1	296	セカイフィルム社	土田商會		免2新
○	20568	聖將乃木傳 1	1	297	セカイフィルム社	大島清勝		新
○	24451	新篇 不滅乃木 16	5	1220	加藤敏一			免2複
○	25023-25025	新篇 不滅乃木 17～19	5	1220	世界フィルム社	加藤敏一		同複
○	25100	新篇 不滅乃木 20	5	1220	加藤敏一			免2複
○	28233	新篇 不滅乃木 21	5	1220	加藤敏一			免2複
○	29419	新篇 不滅乃木 22	5	1220	セカイフィルム	加藤敏一		免2複
昭和17年(1942)								
○	4512	新篇 不滅乃木 23	5	1220	セカイフィルム社	加藤敏一		免2複
○	10993	新篇 不滅乃木 24	5	1220	セカイ映畫社	加藤敏一		免2複

	検閲番号	題名	巻数	m数	製作者	申請者	拒否又は制限等	備考
○	11601	不滅乃木 17	2	226	セカイ映画社	小西六	16ミリ、無声	新
○	12785	不滅乃木 18	2	226	セカイフィルム社	小西六	16ミリ、無声	複
○	12786	不滅乃木 19	2	226	セカイフィルム社	小西六	16ミリ、無声	複
○	18013	改訂 不滅乃木 19	2	226	セカイフィルム社	小西六	16ミリ、無声	複
昭和18年(1943)～19年(1944)1～2月								
○	1396	聖將乃木傳 1	1	119	セカイフィルム社	土田商會	16ミリ	免4新
○	2767	聖將乃木傳 2	1	119	セカイフィルム社	土田商會	16ミリ	免4複
○	2768	聖將乃木傳 3	1	119	セカイフィルム社	土田商會	16ミリ	免4複
○	3934	聖將乃木傳 4	1	119	セカイフィルム社	土田商會	16ミリ	免4複
○	4473	聖將乃木傳 5	1	119	セカイフィルム社	土田商會	16ミリ	免4複
○	6047	聖將乃木傳 6	1	119	セカイフィルム社	土田商會	16ミリ	免4複
○	7999	聖將乃木傳 7	1	119	セカイフィルム社	土田商會	16ミリ	免4複
○	10608	聖將乃木傳 8	1	119	セカイフィルム	土田商會	16ミリ	免4複
○	11423	聖將乃木傳 4	1	295	セカイフィルム	大平商事	16ミリ	再
○	11424	聖將乃木傳 5	1	292	セカイフィルム	大平商事	16ミリ	再
○	13004	聖將乃木傳 9	1	119	セカイフィルム	土田商會	16ミリ	免4複
○	13176	聖將乃木傳 15	1	296	セカイフィルム	磯部貴美	16ミリ	再
○	13177	聖將乃木傳 16	1	296	セカイフィルム	磯部貴美	16ミリ	再
○	14687	新篇 不滅乃木 13	5	1080	セカイフィルム	中村義明		新
○	17500	新篇 不滅乃木 24	5	1207	セカイフィルム	日本商事	16ミリ	免4
○	25426	聖將乃木傳 17	1	287	セカイフィルム社	大島清勝	16ミリ	新

註

- 1) Stephen Bottomore, "Joseph Rosenthal: the Most Glorious Profession," *Sight and Sound*, Autumn, 1983, pp.261-265.
- 2) 牧野守編『日本映画論言説体系 22 明治期映像文献資料古典集成②』ゆまに書房、2006年、141頁。
- 3) 上田学『日本映画草創期の興行と観客—東京と京都を中心に』早稲田大学出版部、2012年、44頁。
- 4) 本稿は、第70回 FIAF スコピエ会議(2014)において行った口頭発表「War Films in the Far East: Cataloguing the War Films made before World War I」を増補・改訂したものである。
- 5) 複製技術を基盤とし、製作・配給・興行という複雑な過程をもつ映画は、その歴史において多くの「複数バージョン」を生み出してきた。第69回 FIAF パルセロナ会議(2013年)のシンポジウムテーマでもある、この「複数バージョン」をめぐるのは、当館研究員・大澤浄による以下の報告を参照。「マルチバージョンとメタデータ標準規格」『NFC ニュースレター』第110号(2013年、14-16頁)。また日露戦争記録映画群とともに、NFCが所蔵する「複数バージョン」の二大ジャンルを構成している関東大震災記録映画群のカタログングについては、大澤浄「関東大震災記録映画群の同定と分類—NFC所蔵フィルムを中心として」『東京国立近代美術館 研究紀要』第17号(2013年、48-62頁)を参照されたい。
- 6) 日露戦争当時には、映画撮影用の望遠レンズがまだ実用化されていなかったため、従軍カメラマンが現実の戦闘場面を撮影することは極めて難しかった。NFCに現存する日露戦争記録映画群の中にも、実際に両軍が戦闘で対峙するようなフッテージは含まれていない。

また、1957年にデンマーク国立映画博物館から国立近代美術館(当時)に寄贈された『日露海戦』(パテ社、リュシアン・ノンゲ監督、1904年)と、日露戦争を偲び、その戦跡や記念碑を訪ねる『日露戦争を懐ふ』(映画出版社製作、1930年)の二作品については、『旅順の降伏』のフッテージが例外的に含まれていない。
- 7) 小松弘によれば、日露戦争記録映画が公開されたちょうど1905年頃、観客の意識の中で実写映画と再現映画が区別され始めたという(『起源の映画』青土社、1991年、288-314頁)。
- 8) 日露戦争記録映画の残存調査にご協力頂いた諸機関に感謝申し上げます。残存調査を依頼した FIAF 加盟機関は以下の通り。英国映画協会(BFI)、英・帝国戦争博物館(Imperial War Museum)、米国議会図書館(Library Congress)、仏・国立映画センター(CNC)、西・フィルモテカ・デ・カタルーニャ(FC)、ロシア・ゴスフィルモフォンド、ロシア国立ドキュメンタリーフィルムアーカイブ(РГАКФД)は非加盟。
- 9) 内務省警保局編『映画検閲時報[復刻版]』全40巻(不二出版、1985-6年)に掲載されている日露戦争関連映画をすべて抽出し、本文末に「日露戦争映画検閲リスト」として付した。NFC所蔵プリントに残る検閲番号の痕跡と『映画検閲時報』に掲載されている検閲番号とを照合し、その対応関係が明らかになった作品については、リストの左端に●印を付した。さらに、映画題名、製作者、申請者及びm数の対応関係から当該作品の複製であると類推できる作品については○印を付した。この結果「日露戦争記録映画検閲リスト」内で、●ないし○が付された作品については、当該作品に含まれているフッテージの多くが NFCに所蔵されていることを示している。

なお本稿においては、いわゆる「乃木もの」を中心とした日露戦争に関連する劇映画及び、日露戦争を勝利に導いた東郷元帥関連の記録映画については紙幅の都合により取り上げていない。NFCが所蔵する『在りし日の東郷元帥』[サクラグラフ版](1933年、東京朝日新聞社製作)、『昭和九年六月五日 東郷元帥國葬儀 実況』(1934年、モリモト映画本社謹写)、『東郷元帥国葬の実況』(1934年)、『東郷元帥を偲ぶ』(1935年、文部省製作)については今後の調査対象とした。
- 10) スティーブン・ボトモア(Stephen Bottomore)に直接確認したところ、ローゼンタールを輩出したイギリスにも、『旅順の降伏』のオリジナル版は現存していない。英国映画協会(BFI)が所蔵する2本の断片集の中に数場面が含まれているだけである。ローゼンタールが撮影したと思われるフッテージを含んでいる以下の断片集については今後改めて調査を行いたい。① 'Brigade der Totenkopf' 204655A: scene of war correspondents and of Joseph Rosenthal's shots of entry into Port Arthur. ② 'Russo-Japanese War Programme' 41049A.
- 11) "Revised list of high-class original copyrighted Bioscope films," February, 1905, reprinted in Stephen Herbert, ed., *A History of Early Film*, vol. 1, Routledge, 2000.
- 12) 『旅順の降伏』オリジナル版の全長3800ft に対して推奨されている上映時間が約80分であることから、同作品の適正映写速度は14fpsである。

- 13) UCのカタログ番号1304欄には、U-1と同じ場面「日本軍の横濱出發」の梗概が記載されているのに対し、包囲-1の梗概には、日本軍が「東京」を出發する場面であると記載されている。Stephen Herbert, ed., op.cit., p.91.
- 14) 上田前掲書47頁を参照。カタログ番号02792に「SIEGE AND SURRENDER OF PORT ARTHUR (1500ft) May 20 (E) Urban ph. Joe Rosenthal January 14 (24 Scenes)」と記載されている。Denis Gifford, *The British Film Catalogue*, vol.2, London: Fitzroy Dearborn, 2001, p.123.
- 15) 1905年8月13日の中座での上映に際しては、『旅順の降伏』のオリジナル版と思われる「上の巻」「攻撃中の旅順」「下の巻」「開城後の旅順」が「是れ迄に比類なき三五〇〇尺の最長物」と称して上映されている(『キネマ旬報別冊 日本映画作品大鑑1集』、33-39頁)。中座で上映されたこのフィルムは、オリジナル版の長さ3800ftと近似していることから、「満州におけるロシア軍」のフッテージも含まれていた可能性がある。また、1905年の横浜・喜楽座におけるシネマテックの興行に際しても、「前編 包囲中の旅順」「後編 陥後の旅順」と題してオリジナル版が公開された形跡が認められる。後者の事例については、以下を参照。上田学「観客のとまどい—映画草創期におけるシネマテックの興行をめぐる—」『アート・リサーチ』7号(2007年、136頁)。
- 16) 表3「『旅順の降伏』のフッテージを含む日露戦争記録映画リスト」に掲載されている8本のフィルム以外にも、1930年代に作成された以下4本の日露戦争記録映画において『旅順の降伏』のフッテージが再利用されているが、他と重複しない独立した日露戦争記録映画のフッテージを含んでいないため、表3には掲載していない。『三月十日』(1933年、朝日新聞社製作、鈴木重吉編集、30分)、『不滅乃木』(1937年、世界フィルム社製作、44分)、『聖將乃木伝』(1940年、加藤敏一監督、セカイフィルム社製作)、及び『日露戦捷三拾周年記念 極東戦線』[不完全版](1935年、松竹キネマ株式会社製作、28分)。
- 17) NFCのフィルムライブラリー時代における収集及び上映活動については、以下が詳しい。佐崎順昭「フィルムライブラリー事始—4階映写室時代」『NFCニューズレター』106号(2013年、3-7頁)、及び同「フィルムライブラリー事始(下)—4階映写室時代」107号(2013年、10-11頁)。
- 18) セカイフィルム社の活動実態については、以下を参照。上田学「駒田好洋の晩年—セカイフィルム社の活動とその広がり」『演劇研究』34号(2011年、91-101頁)。
- 19) 『旅順開城と乃木將軍』という映画題名でセカイフィルム社が検閲を申請したのは1935年の「[17740]が最後である。翌年の1936年以降は、新たなフッテージを追加して作成された『不滅乃木』、1940年からは『聖將乃木伝』へと改変が繰り返された。なお『不滅乃木』には「A篇」「新篇」の35mmフィルム、および小西六本店が「改訂」した16mmフィルム、『聖將乃木伝』には「新愛知版」というバージョンも存在していた。
- 20) 『日露戦争記録』を所蔵していた「映画芸術保存協会」は、当館でも「小宮コレクション」としてその名を知られる小宮登美次郎と、文部省芸術科の元職員であり、映画コレクターでもあった鳥羽幸信が「わが国にも欧・米各国に劣らない立派な映画博物館が設けられ、映画史上の重要な作品や資料が保存されるとともに、映画学徒は勿論一般人も自由に映画史の研究や鑑賞を行うこと」を目的として創設した協会である。「第二回 映画の歴史を見る会」(1955年)のパンフレットを参照。
- 21) 1954年11月8日に上映された『日露戦争記録』は、8年後の1962年10月23日に開催された「映画の歴史を見る会—映画誕生65周年記念」において、前回上映時には切除されていた「偽物実写の奉天大会戦」と「日本海海戦」の場面を追加して再映されたという(NFC所蔵プリントには両場面は残っていない)。「映画の歴史を見る会—映画誕生65周年記念」(1962年)のパンフレットを参照。
- 22) 『明治大帝の御英姿及び日露戦争の中心人物 短縮篇』は1929年に大阪フィルム商会により検閲の申請が開始され、その後、9本の複製プリントが作成された。1930年から1935年にかけては、その改訂版の検閲申請が行われている。
- 23) 東郷元帥が横浜埠頭に上陸する場面に製造年度が不明なゲバルト社製のフィルム「GEVAERT BELGIUM」が使用されているが、それ以外の場面ではすべてイーストマンコダック社が1929年に製造したフィルムが使用されている(エッジコードは「—●」[カナダ])。
- 24) 『映画検閲時報』に記載されている9.5mm版の長さ100m(9.5mmのm長としては不自然なため、その複製基素材である16mmボジないしは35mmボジのm長と思われる)と、④9.5mmの実長201.781mに大きな乖離があることから、別素材の接合の可能性も含め、この対応関係については改めて検証が必要である。また、他作品も含め検閲番号の痕跡が残る9.5mmフィルムはNFCに現存していないため、おそらく公開時にも、9.5mmフィルムに検閲番号を直接穿孔するという習慣はなかったものと思われる。
- 25) 牧野前掲書、149頁。



## Cataloguing Russo-Japanese War films

### — The Multiple Versions of Joseph Rosenthal's *Port Arthur Siege and Surrender*

Daibo Masaki

Russo-Japanese War films were seen by a wide range of audiences during their traveling exhibition, and caused a great sensation in Japan. It could be said that they even became a trigger for the emergence of movie theaters and film studios in the late 1900s. Despite the impact they had on the early history of film exhibition in Japan, no fundamental research has been done on them, such as how many actually survived. I researched Russo-Japanese War films in the National Film Center, Tokyo (NFC)'s collection, and found out that most of them are in fact 'multiple versions' of Rosenthal's *Port Arthur Siege and Surrender* (1905), whose original version is not known to survive.

The original *Port Arthur Siege and Surrender* was duplicated, adding different main titles and intertitles and also re-edited several times to make new Russo-Japanese War films. In order to facilitate a future restoration of *Port Arthur Siege and Surrender*, this article will specify what footage survives by cataloguing the Russo-Japanese War films currently held by the NFC. Also, in order to clarify their historical context, I have inspected all of them physically, as well as consulting the Home Ministry's censorship records, which were implemented from July 1925 to the end of WWII.

Although it is currently not possible to restore a full version of *Port Arthur Siege and Surrender*, by utilizing the extant footage held in NFC's collection and the sequence information from Umeya Shokichi's *Treasure of Motion Picture Films* catalogue, an almost complete restoration of this important visual cultural heritage is now possible.

By examining all the footage included in the Russo-Japanese War films, we come to the conclusion that there is nothing shot by Japanese newsreel cameramen in the battlefield. This is most likely the reason for frequent reuse of the footage from *Port Arthur Siege and Surrender*. We can now see that all the films containing footage from it have been repeatedly duplicated in a variety of film formats, as well as altered and edited, a process that would become common in the propaganda films of the 1930s and during WWII.

(Translated by Ishihara Kae)